

平成 30 年 9 月 6 日現在

機関番号：33605

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17255

研究課題名(和文) ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響とその媒介メカニズムの検討

研究課題名(英文) The effect of pink/blue clothing on automatic social behavior and mediation mechanism

研究代表者

石井 国雄 (Ishii, Kunio)

清泉女学院大学・人間学部・講師

研究者番号：40705208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：現代社会においてピンクは「女性らしさ」、青は「男性らしさ」と関連づけられる。本研究は、ピンクと青の衣服の着用が自己概念の変容を生じさせることで自動的判断や行動に影響を及ぼすメカニズムの検証を行った。一連の研究から、ピンク・青の着衣が、自己認知とジェンダー関連態度に一定の影響を及ぼすことが明らかになった。その一方で、媒介過程については、一部の研究において限定的に示されたものの、明確に自己認知の変容を通して態度・行動が変容することを示すデータは得られず、今後のさらなる検討が必要である。

研究成果の概要(英文)：In many cultures worldwide, one stereotype emerges: pink is associated with girls and blue is associated with boys. In this research, we verified the mechanism that wearing pink and blue clothes affects automatic judgment and behavior by causing a change in self-cognition. A series of studies revealed that pink/blue clothes exert a certain influence on self-cognition and gender-related attitudes. On the other hand, although the mediation process was limitedly shown in some studies. Further studies are needed to verify the mediation process.

研究分野：社会心理学

キーワード：ステレオタイプ ジェンダー 社会的認知 着衣認知 ピンク 色

1. 研究開始当初の背景

我々は日常生活においてたくさんの色に囲まれて暮らしているが、それらの色の使い方には様々な社会的な制約がある。その制約は、我々の日常に意識化されることなく浸透しており、その制約があるがゆえに、我々の判断や行動も制約されている可能性がある。とくに、ピンクと青は現代社会においてジェンダーを表象する色とされ、ピンクは「女性らしさ」、青は「男性らしさ」と関連づけられ、衣服や所持品の選択など、我々の思考や行動を制約している。

実験社会心理学では、社会的な刺激が我々の判断や行動に自動的に及ぼす影響を検討してきたが、近年、社会的認知の立場から、色や着衣が認知・判断・行動に及ぼす影響が注目されてきた。Adam & Galinsky (2012) の着衣認知理論によると、衣服を着るという行為は、衣服の持つ象徴的意味を活性化させることにより、着用者の心理的プロセスに影響を及ぼすとされる。そのため、ピンクの衣服の着用は「女性らしさ」、青の衣服の着用は「男性らしさ」にそれぞれ一致した自動的判断や行動を生じさせると考えられる。

また、自動性研究では、先行する刺激(プライム)との接触は、プライムと関連づけられる心的概念を活性化させることで行動に影響を及ぼすことを想定してきたが(プライム-行動リンク)、概念活性が自動的行動に影響を及ぼすメカニズムを実証的に示した研究は少なかった。

2. 研究の目的

ピンクと青の衣服が自動的判断や行動に及ぼす影響の検討と合わせて、衣服の着用が自己概念の変容を生じさせることで自動的判断や行動に影響を及ぼす媒介メカニズムの検証を行う。具体的にはピンクは「女性らしさ」、青は「男性らしさ」と関連づけられるため、ピンクの衣服の着用は「女性らしさ」の自己認知、青の衣服の着用は「男性らしさ」の自己認知を生じさせると考えられる。こうして生じた自己認知は、ジェンダーを志向した自動的判断や行動を生じさせるだろう。

以上のように本研究は、ピンクまたは青の衣服を着用することが、我々の自己認知を非意識的に変容させることを通して、衣服のもつジェンダー・ステレオタイプの特性に一致した判断や行動を生じさせる過程を明らかにすることを目的とする。そのため、自己認知に関する潜在指標を測定するとともに、ジェンダーに関する行動や判断に関する指標を測定し、媒介分析により自己認知の変化が媒介していることを実証的に検討する。

3. 研究の方法

文献研究をおこなった後、主に実験を用いて実証的な検討をおこなった。具体的手続きは、研究成果とあわせて記述する。

なお、当初計画の目的であった、A. 自己認知とジェンダー関連態度・行動に及ぼす影響の検討を行う中で、衣服の色が持つ印象についても検討する必要性が生じたため、B. 衣服の色が他者の印象に及ぼす影響についての実験結果も報告する。

4. 研究成果

A. 自己認知とジェンダー関連態度・行動に及ぼす影響

(1) 女子大学生のジェンダー認知に及ぼす影響

目的 ピンクの衣服を着用したり、見ることが自己認知に及ぼす影響を検討した。また、「男は仕事、女は家庭」というステレオタイプがあることから、ピンクの衣服の着用が女性の職業キャリア意識を弱めるかを検討した。

方法

実験参加者 東京都の女子大学生 78 名が実験に参加した。

手続き 参加者は、ピンクまたは紺色の布を身に着ける条件、またはピンクの布を見る条件に割り当てられた。その後、ジェンダーに関する自己認知を IAT(勢力 vs. 対人関係、自己 vs. 他者)と自己特性評定(作動性 vs. 共同性、7 件法)を用いて測定した。また、職業キャリア意識として、麻生・沼崎(2015)の間接的勢力志向尺度と自律的勢力志向尺度、職業キャリア志向(仕事より私生活(育児、家事等)を優先させたい(R)、結婚後もキャリアとして働きたい)が測定された。

結果 IAT を用いた潜在測定においては、ピンクの布を見る条件において、ピンク着用条件や紺着用条件よりも、自己と対人的特性(vs. 有能さ特性)を結び付ける傾向がみられた($F(2,74)=2.57, p=.08$)。このことは、ピンク色が伝統的な女性ステレオタイプである「能力は低い、あたたかい」を活性化させたためと考えられる一方で、着用することによる影響ではなかった。なお、顕在的自己認知に対する影響は見られなかった。キャリア意識については条件による影響は見られなかった。

媒介過程の検討 本研究では、色による自己認知への影響は見られたものの、キャリア意識への影響は見られなかったため、媒介を検討できなかった。

(2) 看護学生の職業意識に及ぼす影響

目的 本研究は、伝統的に女性と関連の強い職業である看護学生を対象とし、ピンクの

衣服がどのような自己認知やキャリア意識の変化をもたらすか検討した。仮説は、ピンクの着用は女性的な自己認知（共同性）を強め、男性的な自己認知（作動性）を弱めるだろうとした。キャリア意識については、ピンク色が、1) 女性と関連の強い職業である看護師としてのキャリアのイメージを喚起させやすくする可能性、2) 伝統的な性別役割意識（女性は家庭、男性は仕事）を強める2つの方向性の影響が想定されたため、両者を仮説として、探索的に検討した。

方法

実験参加者 首都圏の看護専門学校2校の学生で、すべての項目に回答のあった学生135名分（女性112名、男性23名）のデータを分析対象とした。

手続き 参加者にピンクまたは紺の腕カバーを着用してもらった状態で「あなたが卒業後、実際に看護師として働いている状況をイメージしてください」と教示を行い、「(実際に)働いている気分になって」質問に回答してもらった。

看護師キャリア意識について、「看護職として出世したい」、「看護職としてずっと働きたい」といった項目に対して、7件法で回答してもらった。また、看護師の職務キャリア尺度（石井ら、2005）に回答してもらった。主な項目として、自己能力の開発（「自己の専門分野が明確である」）などがあつた。

さらに、自己認知について、温かさ（e.g., 親しみやすい）、有能さ（e.g., 知的な）に関連した単語を呈示し、各特性が自分にどの程度当てはまるかを回答してもらった。

結果

看護師キャリア意識 各尺度得点を従属変数とし、色（ピンク vs. 紺）×性別の2要因分散分析を行った。その結果、ピンク条件は、看護師キャリア意識が高かつた（ $F(1, 131) = 3.48, p = .06$ ）。さらに、看護師キャリア意識のうち、自己能力の開発得点には交互作用が見られ（ $F(1, 131) = 5.28, p < .05$ ）、女性においてはピンク条件の方が得点が高く（ $p < .10$ ）、男性においてはそのような傾向は見られなかつた。ピンクの着用は女性においては看護師として働く自己をイメージさせやすくさせた一方で、男性においては、自分の性別と衣服のジェンダー性との不一致を感じさせた可能性がある。

自己認知 女性はピンク条件のほうが紺条件よりも有能さ（ $p < .05$ ）と温かさ（ $p < .10$ ）の自己認知が高い一方で、男性においては逆に有能さ（ $p < .05$ ）と温かさ（ $p < .05$ ）が低まる傾向が見られた。

媒介過程の検討 本研究では、調整媒介分析を行い、男女ごとに色によるキャリア意識への影響が自己認知によって媒介されるか

を調べたところ、女性においてピンク衣服によって自己能力の開発が高まる効果が、作動性の認知によって媒介された（95%信頼区間: 0.00:0.14）。このことは、看護学生においてはピンクの着衣が有能な自己概念を活性化させることで、キャリア意識を高めたことを示している。

(3) ピンクの白衣が看護師としての将来イメージングに及ぼす効果

本研究は看護学生を対象として、ピンクの白衣が自己認知と看護師としてのキャリア意識に及ぼす影響を検討した。なお、実際の着衣ではなく、白衣の視覚的なプライミング方法をとった。具体的には、ピンクに彩色された白衣を着用した看護師のイラストを呈示し、それを自分だと思いながら看護師としてのキャリアについてイメージしてもらった。

方法

実験参加者 神奈川県内の看護学校の1年次生71名（女性69名、男性2名）を参加者とし、そのうち女性67名を分析対象とした。

手続き 参加者には、衣服がピンクまたは青に彩色された看護師のイラストを見て、看護師として将来働いているイメージを思い浮かべてもらった。

看護師キャリア意識 イメージ課題が終了後、看護師キャリア意識に関する質問として、看護師の職務キャリア尺度（石井ら、2005）のうち、質の高い看護の実践と追求（「患者や家族の状況に応じた適切な看護が出来る」など）、対人関係の形成と調整（「スタッフの能力を引き出すことが出来る」など）、自己能力の開発（「自己の専門分野が明確である」など）に回答してもらった。

自己認知の測定 自己認知について、人柄、有能さ、女性性に関連した単語を呈示し、各特性が自分にどの程度当てはまるかを回答してもらった。あわせて、イメージ課題の想像しやすさについて回答してもらった。

結果

看護師キャリア意識 色の効果はイメージの想像しやすさが調整していた。質の高い看護の実践と追求について、想像しやすさ低群においてはピンク条件と青条件による差が見られなかつたが、想像しやすさ高群ではピンク条件の方が青条件より得点が高まる傾向にあつた（ $F(1, 63) = 3.74, p < .10$ ）。

自己能力の開発については、想像しやすさ低群においてはピンク条件と青条件の差が見られなかつたが、想像しやすさ高群ではピンク条件の方が青条件より得点が高まっていた（ $F(1, 63) = 6.48, p < .05$, Figure 1）。

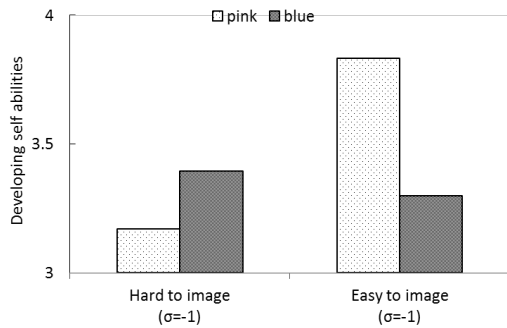


Figure 1. Ratings of developing self-ability as a function of color and ease of imagine.

自己認知 人柄において交互作用が有意傾向となっており、全体的には想像しやすさ低群よりも高群の方が得点が高い傾向にあった。この効果は色条件によって調整され、想像しやすさ低群においてはピンク条件と青条件による差が見られなかったが、想像しやすさ高群ではピンク条件よりも青条件の方が人柄がよいという自己認知が高まる傾向にあった ($F(1, 63)=3.99, p<.10$)。

こうしたことから、イメージのしやすかった者に限定されるものの、ピンクの白衣は看護学生にとってキャリア意識を高めることに寄与することが示唆される結果となった。

媒介過程の検討 調整媒介分析を行い、想像しやすさ高群と低群に分けて、色によるキャリア意識への影響が自己認知によって媒介されるかを調べた。その結果、想像しやすさ高群においてピンク条件で自己能力の開発が高まる効果が、共同性の認知によって媒介される効果が有意に近かった(90%信頼区間: -.33: -.0.01; 95%信頼区間: -.39: 0.00)。看護学生においてはピンクが共同的な自己概念を活性化させることで、キャリア意識を高めたことを示唆している。

(4) ピンク・青の化粧が女性の自己認知・ジェンダーを志向した選択行動に及ぼす影響

本研究は、伝統的に女性的な装飾である化粧を題材として、ピンク色と青色の化粧がどのようなジェンダー的な認知や判断に影響をもたらすのかを検討した。仮説を、ピンクの化粧は青の化粧よりも、1) 女性的な自己認知を強めるだろう、2) 女性的な選択行動をしやすくなるだろう、とした。

方法

実験参加者 長野県的女子大学生 21 名が実験に参加した。

手続き 化粧が気分や自己イメージに及ぼす影響として、個別実験を行った。化粧セッション前に、感情チェックリストを含む質問紙に回答してもらった。

化粧セッション ピンク条件の参加者には、ピンク色のアイシャドウとチークを、青

条件の参加者には青色のアイシャドウを施した。その後、感情チェックリストに再度回答してもらうとともに、普段の化粧の頻度など、化粧に関する質問を行った。

特性評定 化粧セッション後、質問紙にて、男性ポジティブ語 (e.g., 勇敢な), 女性ポジティブ語 (e.g., 献身的な), 男性ネガティブ語 (e.g., 傲慢), 女性ネガティブ語 (e.g., わがままな) の各 10 項目を呈示し、それぞれの特性が自分にどの程度当てはまるかを回答してもらった。

男性・女性らしい物の選択 男性らしい物の写真 10 枚 (例: 万年筆, リュックサック) と、女性らしい物の写真 11 枚 (例: リボン, ぬいぐるみ) を呈示し、好きなもの、欲しいものをそれぞれ 4 つ選んでもらった。

結果

化粧後の気分 ピンク条件のほうが青条件よりもポジティブ気分が強まっており ($F(1, 17)=15.91, p<.001$)、その傾向は化粧に親しみのある人においてのみ見られた ($F(1, 17)=3.03, p=.09$)。

特性評定 条件に関連した効果は見られなかった。化粧という行為が女性性を全体的に高めた可能性がある。

男性・女性らしい物の選択 女性らしい物の選択数において条件×化粧への親しみの交互作用が見られ ($F(1, 17)=4.91, p<.05$, Figure 2), 青条件において化粧に親しみがあるほど女性らしい物を選択していた ($p<.05$)。普段とは異なる化粧の色がかえって自分の女性らしさの意識を強めた可能性がある。

媒介過程の検討 本研究では、色による行動への影響は見られたものの、自己認知への影響は見られず、媒介を検討できなかった。

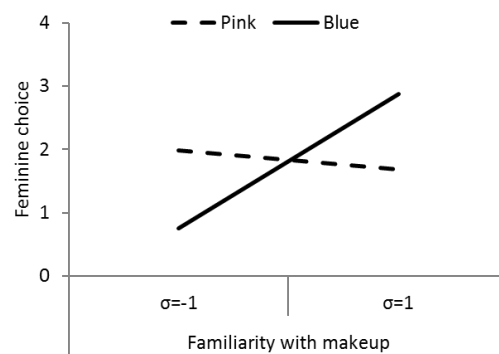


Figure 2 Feminine choice as a function of color and familiarity.

(5) ピンクの衣服が自己認知と摂食行動に及ぼす影響

本研究は、ピンクの衣服の着用が自己認知や行動の違いをもたらすか検討した。とくに、行動として食行動を取り上げ、ピンクの衣服の着用によって女性的なイメージに合致した小食という行動に結びつくかを検討した。

方法

実験参加者 長野県的女子短大生 42 名が実験に参加した。参加者には事前に公的自己意識尺度（菅原，1984）に回答してもらっていた。

手続き 「日常の行動傾向が味覚に及ぼす影響」とのカバーストーリーの下，個別で実験を行った。参加者は，ピンクまたは白の白衣を着用し，以後の課題を行った。

試食課題 味覚の調査として，参加者は 3 種類のお菓子を食べながら，食べ物の印象についての質問紙に回答した。回答時間は 10 分間であり，この間はいくらでもお菓子を食べて良いと説明した。摂食前後のお菓子のグラム数を計測した。

自己ステレオタイプ IAT PC 上で IAT を行った。カテゴリは，“自己-他者”，“男らしさ-女らしさ”を用いた。

特性評定 質問紙にて，男性関連 20 語（例：勇敢な），女性関連 20 語（例：献身的な）を呈示し，それぞれの特性が自分にどの程度当てはまるかを回答させた。

結果

試食課題 学生の専攻（生活 vs.国際）も要因に入れた分析を行ったところ，生活専攻の学生（日常的に白衣を着用している学生）においては色の影響は見られなかったが，国際専攻の学生においては，公的自己意識が低い場合には，ピンク条件のほうが白条件より摂食量が多い一方で，高い場合には，ピンク条件のほうが白条件より少なかった（ $F(1, 38)=5.52, p=.009, \text{Figure 3}$ ）。

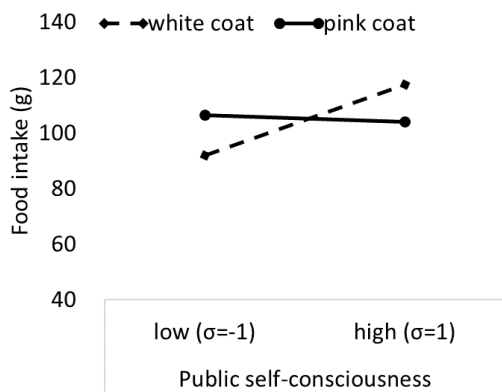


Figure 3. Food intake as a function of color and public self-consciousness (students in department of international studies).

自己ステレオタイプ IAT 自己と女性らしさとの結びつきを示す D 値を従属変数とした結果，公的自己意識が低い場合には，ピンク条件と白条件の差は見られなかったが，高い場合には，ピンク条件のほうが白条件よりも D 値が高かった（ $F(1, 38)=3.70, p=.06$ ）。

特性評定 公的自己意識が高い場合の男

性ネガティブ語の自己評定が，ピンク条件よりも白条件のほうが高くなっていた（ $F(1, 38)=4.52, p=.04$ ）。

潜在的・顕在的測度において，公的自己意識の高い場合に，ピンクの白衣の着用がより女性的自己認知をもたらすことを示す結果が得られた。摂食行動については，日常的に白衣をあまり着用しない学生においてのみ，ピンクの白衣の着用の影響が生じ，その影響には公的自己意識の調整効果があった。

媒介過程の検討 本研究では，色による自己認知への影響，摂食行動への影響はそれぞれ見られたものの，自己認知から摂食行動へのパスは有意とならず，媒介過程は示されなかった。

まとめ：自己認知とジェンダー関連態度・行動に及ぼす影響

それぞれの研究で示された結果は以下の通りであった。

(1) ピンクを見ることが，自己と対人的特性を結びつける潜在的認知を強めた。一方で，ピンクの着衣の影響は見られなかった。

(2) 女子看護学生において，ピンクの着衣は看護師としてのキャリア意識を高めた一方で，男性看護学生においては逆に低下していた。

(3) ピンクの白衣を着た看護師イラストを用いて将来のイメージをした場合，女性看護師のキャリア意識が高まった。

(4) 青の化粧をした場合，化粧に親しみがあるほど女性らしい選択行動を行っていた。

(5) ピンクの衣服を着た女性は，女性的な潜在的自己認知が高まり，小食になっていた。

一連の研究から，ピンク・青の着衣が，自己認知とジェンダー関連態度・行動に一定の影響を及ぼすことが明らかになった。とくに，ピンクは女性的な自己認知や行動を生じさせる可能性が示唆された。なおその影響は，実際の着衣の場合には公的自己意識のような外界に対する注意の強さ，着衣のイメージの場合には想像しやすさといったように，内的変数によっても調整され，ときに着衣の色の含意するステレオタイプと逆方向に自己や行動を変容させることが明らかになった。その一方で，媒介過程については，一部の研究において限定的に示されたものの，明確に自己認知の変容を通して態度・行動が変容することを示すデータは得られず，今後のさらなる検討が必要である。

B. 衣服の色が他者の印象に及ぼす影響

(1) バッグの色が女性に対する魅力に及ぼす影響

服飾品の色とジェンダー性がどのように関連付けられるかを検討するため，所持品

(バッグ)の色を赤・青・黒に操作することで、女性人物への魅力度など対人的印象がどのように変わるのかを検討した。

実験の結果、赤色のバッグを持った女性は性的魅力が高く評定される傾向にあったが、この傾向は恋人のいる人においてのみ見られた。このことは赤色と異性愛との関連性を示している。

(2) 赤の服装が女性に対する性的魅力と意図の推測に及ぼす影響

知覚者にとって赤やピンクといった衣服の色とジェンダー性がどのように関連付けられるかを検討した。具体的には衣服の色を赤・ピンク・青に操作することで、女性人物への性的魅力や異性への性的意図など対人的印象がどのように変わるのかを検討した。特に本研究は女性を参加者として行った。

実験の結果、赤色・ピンク色の衣服の女性は性的魅力が高く評定され、異性への性的な意図を持つと評定された。また、赤・ピンクの衣服による異性への性的な意図の知覚への影響は、性的魅力の知覚によって媒介された (Figure 4)。このことは女性が他の女性を認知するとき、赤色が異性へのライバル視を強める可能性を示唆している。

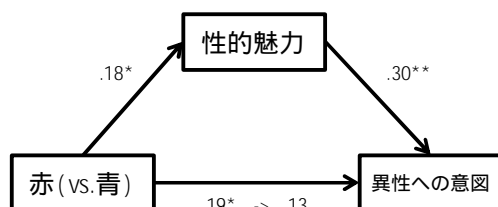


Figure 4. 赤の衣服が異性への意図推測に及ぼす効果

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 石井国雄・田戸岡好香 (2018). ピンク/青の化粧がジェンダー的な自己認知と選択に及ぼす効果 清泉女学院大学人間学部研究紀要 15, 1-12. (査読なし)
2. 石井国雄・加藤樹里・田戸岡好香 (2017). ピンクの白衣が看護師としての将来イメージに及ぼす効果 清泉女学院大学人間学部研究紀要 14, 13-24. (査読なし)

〔学会発表〕(計4件)

1. 石井国雄・田戸岡好香 (2017). ピンク/青の化粧がジェンダー的な選択に及ぼす効果 日本社会心理学会第58回大会発表論文集, 137.
2. 石井国雄 (2017). バッグの色が女性に対する魅力評価に及ぼす影響 日本心理学会第81回大会発表論文集, 2A-016.

3. Ishii, K., Kato, J., Tado'oka, Y., & Matsuzaki, K. (2017). The effect of gender identity salience on male nurse's self-perception and work motivation. A poster presented at International Convention of Psychological Science (Vienna) VI-090.
4. 石井国雄・加藤樹里・田戸岡好香・松崎圭佑 (2016). ピンクの衣服が看護学生のキャリア意識と自己認知に及ぼす影響 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 184.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 国雄 (ISHII, Kunio)
清泉女学院大学・人間学部・専任講師
研究者番号: 40705208

(2) 研究協力者

田戸岡 好香 (TADO'OKA, Yoshika)
高崎経済大学・地域政策学部・准教授
研究者番号: 10794018

松崎 圭佑 (MATSUZAKI, Keisuke)
首都大学東京・人文科学研究科・D3

加藤 樹里 (KATO, Juri)
金沢工業大学・情報フロンティア学部・助教
研究者番号: 10805401